



# 宮崎リンネ會報

Annals of Miyazaki Linnean Society

第 13 號

昭和 25 年 9 月 30 日



宮崎リンネ會發行

## 目 次

- |                          |                            |
|--------------------------|----------------------------|
| (1) 我家の庭の生物雑記(1)         | 佐々木 貞 枝…………… 1             |
| (2) 笈埃隨筆に現れた日向の生物相       | 日 高 次 吉…………… 2             |
| (3) 卷舌に關する調査             | 宮崎師範生物專攻生… 5               |
| (4) 日食時に於ける動物の動作         | 萱 島 泉…………… 7               |
| (5) アブラムシに關する二つの觀察       | 河 野 昭 敏…………… 9             |
| (6) 米良地方の昆虫相研究(第一報)      | 松澤寛・中武千治<br>板 橋 敏 光……………10 |
| (7) 高岡本庄地方に於ける松喰虫に就て     | 上 坂 名……………17               |
| (8) 日本腦炎と宮崎縣の蚊類          | 松 澤 寛……………19               |
| (9) オキナハルリチラシに就いて        | 中 武 千 治……………21             |
| (10) 電話地下ケーブルに障害を與える害虫   | 中島茂・清水薫……………22             |
| (11) 光週反應をする植物           | 中 山 至 大……………24             |
| (12) 宮崎縣の追加すべき蛇類         | 市 場 利 哉……………25             |
| (13) 宮崎縣産植物目錄補遺(Ⅰ)       | 平 田 正 一……………26             |
| (14) 兒湯郡三納村吉田附近の羊齒類      | 瀧 一 郎……………31               |
| (15) 尾鈴山に於ける羊齒類の垂直分布について | 瀧 一 郎……………34               |
| (16) 宮崎リンネ會(昭和23—24年度)記録 | ……………37                    |



# 我家の庭の生物雜記〔1〕

佐々木 貞枝

妻 高等學校一年

私は舊妻高女時代から生物の勉強がすきで、よく兄や姉について採集にいたり、観察に出かけたりしていますが、日常の生活に於いても、よくいろいろな事に注意深く観察する習慣が出来て、大變うれしく思つています。近頃私の家の庭でいろいろ面白い事が観察出来ますので、ここに2、3御報告したいと思ひます。

(1) ドウガネブイブイ *Anomala cuprea* Hope ラカンマキ *Podocarpus chinensis* Wall. を食害する

之まで、私が不注意だつたので分らなかつたのかも知れませんが、今年は庭のラカンマキ(高さ約5m)の實にたくさんドウガネブイブイがついて、その若葉を食害しています。恐らく何百匹もいることでしょう。本種は普通ブドウの葉を食害するのでよく人に知られていますが、*Podocarpus* 屬の樹木を害することは、あまり知られていない事だと思います。おかげで私の家のこの木はあわれな姿になつてしまいました。この木にはなお害虫として一種のアブラムシがありますが、白いコナをふいた明かるい小豆色をしています。種名はまだよくわかりませんが、枝の梢部で加害します。

(2) ヤシヤビシヤク *Ribes ambiguuum* Maxim.

これは深山の樹上に托生するユキノシタ科の落葉小灌木で、一名テンバイ(天梅)、テンノウメとも呼ばれます。本種はそれほどめづらしい種類ではないようですが、宮崎縣に産する事は知られませんでした。日野及び遠藤先生の本縣の植物目録(1937)平田先生の追加目録(1948)にも記録されていません。私の家のものは兒湯郡西米良村尾股産のもので、同村中武安正先生の採集寄贈にかゝるものです。(詳細は牧野博士;日本植物圖鑑によらねたい)。同地方では本種は、その種子がムササビ(方言=モマ)の腹中を一度通らないと完全な植物にはならないといわれるそうです。

(3) ウスバキトンボ *Pantala flavescens* Fab. の群團

ウスバキトンボ(妻地方ではボントンボ又は赤トンボともいう)が群團を作つて活動することはよく知られています。夜間休息時でもこれは蟲の垣根などで、群團のまま一夜を過します。今この群團の數について、私の家の附近で、昨年(1948)夏しらべた所を述べると次の様です。但し、多少の誤差は免れま



せんし、又性比 (Sex-ratio) も調査不可能でした。

群	團	個 体 數 (觀 測 3 回 平 均)
I		47,3
II		38,3
III		32,0
IV		40,7
V		35,0
總	數	193,3
平	均	38,7

以上の様であります、それらの性比や光と群團全体の活動などをしべると一層面白い事でしょう。

## 笈埃隨筆に現れた日向の生物相

日 高 次 吉

妻 高 等 學 校

「笈埃隨筆」は京都室町の豪商塘雨といふ人が、安永の初年から天明の末年迄一今より約百六七十年前一諸國を遍歴して書きとめた漫遊記であるが、其中で日向に關する記事で日向の生物について興味のあるものが多いので、二三紹介して大方の參考に供しようと思ふ。

(一)「高千穂嶽」の條に次の記事がある。これは西臼杵の高千穂である。

襲高千穂岳は神孫降臨我日本開闢の根元也……日向國の北地にて、西は肥後、北は豊後に隣りて……麓に十八村有り。絶頂に至る事三里、峰二ツ聳えれば二上嶽と稱せり。奇巖靈窟多く皆神跡なり。就中十社神といふ事、南五町許り坂路に、豎八九尺横五六尺なる繁田有り。毎年自然に稻出ひ出て穂をなす。則天孫降臨稻穂を打蒔て雲霧を祓ひ給ふ遺種なるゆへ千穂峰といふ。これを土人不蒔稻とも、實祿田ともいふ。云々

高千穂に天然の稻が生ずるといふのである。私もこのことについて嘗てチラツときいたような氣がするが、何と解釋す可きであらうか。

(二) 次は日向の鶴と關聯した二番稻のことである。

九州には鶴多し。尤捕る事制禁也。丹頂は少し。多くは灰色黑色也。日向に

ては鍋鶴といふ。予初彼地に在し時、白鳥をも度々見たり。年を追て希なり。故に不審して問ければ、土人の曰、其事也。此邊はむかしより田を刈取て跡を捨置ば二番稻生ふ。是を干土田と云。此田へ水を溜置ば、春に至り古株より苗自然に生ふ。此稻は春毎に種蒔せしより米も能、穀數も倍して出来る也。然れども人世智に走りて其事をせず。冬に至れば鋤返して麥を蒔て糧に充つ。故に鶴の下る事少し。殊更制禁あれども打捕る事多き故なり。誠に左もとおもひ合せぬ。云々

明治の初年頃迄日向の諸所に鶴が渡つて来て居た話はよくきいて居るが、此處で問題にしたいのは、二番苗及干土田のことである。高千穂の自然稻と考へ合せて、何か興味のある研究対象になるのではあるまいか。

(三) 今日では月竝な知識であるが、日向山地の野生茶について記載されてある。先づ米良山の畑焼の慣習について佐土原での話を書きとめられてゐる。

日州佐土原の人云けるは、この焼畑をなすに、其所へ先芽を出すものは茶の木なり。しかれば茶の木上代より我國に有しならん。其煎服する事はしらざるゆえ捨置しと覺ゆと。云々

以上は米良が田地が少ないので、年々山間の樹木を伐捨て、其跡を焼き拂ひ、粟、稗、芋などを作る場合の畑焼についての、當時の佐土原の話である。恐らく前項に述べた鶴と干土田の事も佐土原できいた話ではなからうか。佐土原と廣瀬との大体中間にある田島及天神一共に廣瀬村の内一には明治の初年頃迄ざらに鶴が来て居たさうである。

更に又他の卷では次のように同じ意味の事が記されて居る。

予日向國にありし時、國人云、米良山など焼畑をすれば、先茶の木初て生ず。然れば元來茶は有べしと云へり。

(四) 次は日薩偶三州の竹の種類についての記事を紹介しよう。

日薩偶には竹數種あり。孟宗竹は寒中に筍あるを以て名づく。太さ二尺餘に至る壹尺七八寸は常也。然れども竹薄く節の交理一筋なり。故に畿内の人葭竹といふて、葦の類とするは非なり。また四方竹は四角にして、太さ僅五六寸に過ず。交州在方竹筍として可なりと、博物志に云是なり。又一種キンチクといふあり。他國にては見ず。太さ五六寸、筋の間長く、中の巢細し。性水を好んで叢生す。尤柔なり。國人この竹を四枚に裂て皮なる方をとり綯て綱とし船毎に貯ふ。能く水に堪て強し。云々

三種とも我々になじみの竹である。

(五) 青島について次の二三の記録がある。

「日向折生迫の海に、回り廿町程の小島有り。青島共、齒朶浮島ともいふ。

……四時草木綠青にして、世にまれなる靈草を生ず。云々

予日向青島に兩度、三月三日に參詣せり。檳椰子の大なる數株、宮社の四方に有し。其外種々異草ありて、花うつくしかりしか供。島の法令點し難く、取事止て歸りぬ。

都鳥は貝原氏云、勢語にのせたるにや。香椎瀉にあり。芥足赤く白黒斑にて大さも龜に類すと、日向の國青島に、昔より雌雄あり。島の神使とす。此島靈島なればにや、若潮死の物ありて、島近く流れ寄るなどの不淨あれば、此島其地の庄屋の家に來り喧く啼。

日州折生迫海中青島に檳椰子多し。高さ五六尺計り、和訓アヂマサと云蓋味勝なり。上代には我國も閩廣の如く、今の茶を嗜て食るにや。花曆百詠にいふ檳榔、賓興郎、皆貴客之稱、土人遇客必薦故名付く。

檳榔、其他の珍しい植物が今のように自生して居た事が思はれると共に、一種の海鳥の存在を知る。

(六) 其他、飢肥領の大蛇のこと。日向山中に天の梅といふ葉はいちじくに似て赤く、實は庭梅ににたものがあること。高岡の月知梅のこと。鹿兒島に麝香鼠といふのが居て、其糞臭麝香にて居るが、器物調度等に大害をなすこと。薩摩に天道大根といふ自然生の大根のあること。飛彈蜂加郷に自然生の蕪のあること。等、興味の多い記事の中に、次の一節は生物分布學上の一資料を提供するものではあるまいか。

九州の間所々に形狀も名もしらぬ、我朝にて一向に見馴ざる木多く、土人の云、是等は渡り鳥の其木の實を食て渡り來る自然と生出で大樹を成しと云へり實も木の實生じがたきときは、一旦鶉にはましめて其の糞中にあるを蒔ば、能生ずといひしも宜なり。鷹の渡るは、必ず小鳥の後なり。其故は先へ餌とすべき小鳥を渡し置て、跡より來るも又かしこし。都て八九月の間に、北風烈しく吹事あり。これを鳥渡しとも鷹渡しともいふ。この風に乗じて來るとなん。

# 卷舌に關する調査

生物學專攻生

宮崎師範學校

はしがき

舌の左右兩縁を卷上げて筒形になし得る人と、なし得ない人が、あるが之が簡単な遺傳様式によるものらしいことは、すでに京大駒井博士によつて一般に紹介せられたことである(遺傳Vol. 1, No 1, 1947)。しかし舌の卷けない人が凡そ25%内外(男子30%、女子20%)あることも知られて居り、其後2、3の調査も行われている。

本調査は本校松澤教官の指導の下に3年生物學專攻生相協力して行つた。

## I 親子の關係

本調査は宮師附中、市立宮中2校の生徒の家族より資料を得たのであるが、記載不十分のものや、明かに嘘偽と思われるもの等相當あり、之等を除外した268家、1578名について行つた。申卷けないものは男子835名中184名(22%)、女子は743名中167名(22.5%)であつた。(以下卷ける、卷けないを「+」「-」であらわす)

- (1) 兩親が「+」「+」なる組は全部で199組であつたが、子に「-」の者のある家族は85組で、その中の「-」の子の總數は417名「+」「-」中123名でWeinbergの同胞法によつて補正した比率は1:3.7で少しく比幅が狭かつた。
- (2) 兩親が「+」「-」なる組は44組であつたが、どの組共その子には「-」を含み、その數は195名(「+」「-」)中90名であつた。同胞法による補正の結果は1:2.1で、僅かに比幅は大であつた。
- (8) 兩親が「-」「-」なる組は25組であつたが、本來ならば「+」の子の出ることはない筈であるのに、101名中20名が「+」であつた。或はこの中にも不正確な資料が少數あるかも知れないが、練習其他によつて「+」になり得ることも考えられる。事實中には練習によつて「+」になり得る者もあるし時には「+」「-」の判然と區別出来ないこともある。その様なことも此種の調査には關係して來ることを考慮しなければならない。

大体以上の様で、この卷舌が簡単な遺傳様式によるものらしいことは考えられる。しかしその表現は複雑で、また時により練習其他による「+」もある様である。今度の成績では一般に駒井博士の示されたものより「-」數が少く22



%位になつた。或は地方的に差異があるものかも知れない。(1)(2)については Apert及Bernsteinの先驗法を適用すべきであるが、省略する。

## II 學童に見られる「+」「-」の割合

本成績は宮師附小、東臼杵美々地小、兒湯郡三財小より得た資料の綜合である。今「+」「-」についての人員並に%を示せば次の2表の様である。

學年	男子		女子	
	+	-	+	-
1	67人	52人	90人	58人
2	67人	33人	61人	30人
3	55人	30人	66人	28人
4	82人	30人	69人	24人
5	101人	38人	87人	25人
6	70人	27人	64人	15人

學年	男子		女子	
	+	-	+	-
1	56.3%	43.7%	60.9%	39.1%
2	67.0%	33.0%	67.1%	32.9%
3	64.6%	35.4%	70.3%	29.7%
4	73.3%	26.7%	74.2%	25.8%
5	71.9%	28.1%	77.5%	22.5%
6	72.2%	27.8%	81.1%	18.9%

以上の如く低學年にあつては男女共「+」「-」大略同じ位であるが、學年の進むにつれて次第に「-」の割合は減じ、高學年では男子27~28%、女子は18~22%となる。即ち駒井博士の示された男子50%、女子20%に大略近い。全体的にみた時、男子の方が少しく女子より「-」の割合が大である。

乳幼児は大抵舌を卷いて乳房を吸うことが出来るといわれ、生長するにつれて次第にこの能力を失うものが出て来るらしい。之がこゝにいう「-」であらうと考えられるが、人種によつて多少「+」「-」の率を異にするものらしくまた同じ日本人でも地方により多少差異が見られるのではないかと思う。

生物學專攻生：飯干寶市 岩田敏男 神田橋敦久 七條桂子 藤原千恵子  
岩村哲雄 入來和子 佐野フジ子 瀧一郎 宮崎恵美子



# 日食時に於ける動物の動作

萱 島 泉

本庄高等學校

昭和23年5月9日宮崎地方に於ては、太陽の80%がかける部分食を観察する事が出来ました。此の部分食を理論的時間で見ますと、入食が10時46分8秒、食甚は12時14分、復食が13時43分4秒となつて居りましたが、実際には観測者により多少のずれがあつたのであります。

此の約3時間の中に二、三の蜘蛛と昆蟲の動作を観察致しましたので、此處に述べさせて戴きたいと思ひます。元來日食時に於ける動物の観察は、よほどしつかりとした準備をしてかからねば、正確な記録を得ることは困難であります。

先づ第一に必要な事は、観察しようとする動物の通常の習性を熟知することで、これを知らねば日食時の特異な動作を知ることも、亦その面白さを見ることも出来ません。次に食の進むにつれて、温度の下降を來たすものですが、これは觀察地によつて異なるから特に精密な測定を必要と致します。

今回私が實驗に使用しました蜘蛛と昆蟲についての觀察結果は次記の様でした。

## 1. クサグモ (*Agelenalimbates* Th.)

入食後30分の11時20分頃までは、平常と變りがなかつたが、その頃より棚網の中を敏捷に動き始め、10分後には蛛疣を盛んに動かして、巢を修繕する動作に變つた。この動作は普通の状態では、早朝か夕刻にするものであります。12時25分頃になつてやつと、元の位置に静止しました。此の時刻は食甚を過ぎて15分後で気温が昇り始めた時でありました。それより日食の終了するまで静止の体勢をとつて居りました。

## 2. シロガネグモ (*Leucauge blanda* L. Koch)

入食後45分ばかりは脚を伸ばし巢の中央に占座してゐたが、それより少しく体を動かしたり、脚を縮めたりし始めた。それが約10分続いた11時40分には、すっかり脚を縮めてしまつて静止して、丁度うづくまつた様子になつた。これは夜間此の蜘蛛の取る体勢であります。

## 3. アシナガグモ (*Tetragnatha praedonia* L. Koch)

入食より11時50分までは、身動きもせず静止してゐたが、此の頃より脚を縮め始めた。この時の気温は19度8分で入食當時より3度下降してゐた。これよ

り20分たつた12時10には、巢の中央より移動し木の枝の下側に、脚を伸ばしてへばりついてしまった。丁度食甚の時で気温は18度になつてゐた。この体勢は夜間か日中の暑い時にとる体勢であります。

4. イヘバイ (*Musca domestica* L.) 及びサシバイ (*Stomoxys Calcitrans* L.)

糊の腐敗したものと、ハゼの腐敗したものを2頭同じ皿の上に置きこれを観察台に置いて観察してゐると、入食時にはイヘバイ5匹、サシバイ3匹となつたこのときダスターにメリケン粉を入れて、これらの蠅に吹きかけた。体の所々と脚とが眞白な8匹の蠅が出来たがそれでも元気で盛んに外の蠅と、餌にとまつたり他に飛んでいつたりしてゐたが、11時55分頃から蠅全部の活動がにぶり40分になると皿の上には一匹の蠅も姿を見せなかつた。それで附近をさがすと大部分は物置や便所の板壁に静止してゐるのを見出した。白のマークをつけた蠅もその中にゐた。此の状態は12時25分まで續いて、この間に地震があつたが矢張り一匹の蠅も飛ばなかつた。

12時25分を20秒過ぎたとき、マークのあるサシバイが一匹餌にもどつてきました。12時35分に又一匹のマークのあるサシバイが歸つて来て、12時40分になるとぶんぶんと蠅が自分の周囲をとび如めました。12時55分頃には元の様にうるさい程活潑に活動し始め、復食の13時45分には餌にイヘバイ15匹、(マークのあるもの3匹) サシバイ7匹(マークのあるもの全部)が集つてゐた。イヘバイでもサシバイでも最初に餌に飛んで来たのはマークのあるものであります。

5. イヌマキノアブラムシ (*Neophyllaphis pedocarpi* Takahashi)

通常この昆虫の集團的な移動は余り見受けられない所ですが、入食の前10分頃より、寄主のイヌマキノの枝や葉から幹へと移動を開始して、11時20分には早や枝や葉には一匹も姿がなく、何千匹と云う此の昆虫が幹に集合してゐた11時30分には次第に下降し、上に向つて移動するものが殆んどなくなつて食甚の12時10分頃には幹から地面に這ひ出してゐるのも居りました。12時25分になると活動が止まり、全部静止状態に入り、これが約一時間續いて、13時20分にほつほつ動くものが出て、13時30分には一同の移動が上の方に向つて行はれ、復食の13時43分には幹をぞろぞろと這つて枝、葉に向つて移動して居りました。その移動も13時になつて大体終了し、以前の如く枝、葉に静止し集團生活を始めました。

以上のことがらを理論づけて種々考察しますと大變面白いのでありますけれども紙面の都合でこれだけに致します。

# アブラムシに関する2つの観察

河野 昭 敏

妻 高 等 学 校

本年夏休を利用し表題の如き観察を行つたので、こゝに簡単に報告する。供試アブラムシはキビクビレアブラムシであるが、実験を行うに當つて種々お教をねがつた本校日高次吉先生に厚くお禮申上げる。

## 1 雌親虫の胎生について

アブラムシ類が単性(爲)生殖をすることはよく知られているが、その胎生の状態を詳しく書かれたものは殆んどみない。私は本年顕微鏡下で親雌虫の形態観察中、偶然にその胎生の状態をみる事が出来たので、ありのままその状況をお知らせする。

最初仔虫が産れる時には、觸角、肢をちぢめたまま、尾部から先に出はじめるが、その時さすがに親は腹部を緊張したり、ゆるめたりして出産をたすける。次第に仔虫が外部に現われ、いよいよ頭がぬけかゝる頃になると、はじめて各肢を動かす始める。仔虫は最初は全体淡黄色で時間の経過と共に色の深さを増してくる。私はこの時2匹の仔虫が連続して産れるのをみたのであるが、最初のが産れるのには約20分、後のが産れるのには40分位かゝつた。

私が観察中、次第に仔虫が外部に産み出されて、もう觸角も現われ、しきりに脚や觸角を動かしていたが、どうしても親から離れることが出来ず、10分位もがいていた。その中に背中をグーツと反らしたり、下面に曲けたりする運動を3~4回繰返し、遂に後の2本の脚で親虫の体につかまつて離れてしまつた。

幼虫は産れてすぐからアチコチ歩き廻るが体の割合に吻が長い。

## 2 気温とアブラムシの歩行速度

気温とアブラムシの歩行速度との関係を観察したところを述べると、1親又は1仔虫を各1分間にどれ丈歩くか3回計りその平均をとつてみると次の表の様であつた。但し之は室温であるので、他の要素の影響も考えねばならないが大体の傾向は覗えると思う。

温度(攝氏)		25.5		27.0		29.0		30.0	
歩行距離(cm)									
成 虫	A	9,8	D	12,5	G	15,1	J	22,1	
	B	6,9	E	9,2	H	13,3	K	19,8	
	C	14,4	F	8,5	I	14,9	L	20,6	
幼 虫	a	6,5	d	3,4	g	6,4	j	7,2	
	b	2,9	e	3,9	h	5,3	k	9,3	
	c	2,6	f	3,5	i	6,3	l	7,7	

アルハベットは供試虫を示す

# 米良地方の昆虫相研究(第1報)

松澤 寛・中武千治・板橋 敏光

宮崎大學生物學教室

## は し が き

米良地方の昆虫については、之迄殆んど何等の紹介もない様であるが従來余りこの方面の研究家が訪れなかつたからでもあろう。しかし自然的條件を併せ考へる時、當地方にも可成多數の注目すべきものが見出されるのではないかと思ふ。筆者等は昨年(1947)より此地方の昆虫について調査を行つてゐるが未だ前途遼遠で幾何の資料も得ていない。しかし、之迄に明かにし得たものをまとめて初回の報告とする。

## I 採 集 昆 虫

### A 双 翅 目

#### (1) ショクガバエ科

ハナアブ(30/V—48村所、3/VI—48二軒橋) シマハナアブ(30/V—48村所、3/VI—48二軒橋) オオヒラタアブ(2/VI—48村所) ヒメヒラタアブ(1/VI—48村所) ビロウドハナアブ(2/VI—48村所) クロベツコウハナアブ(2/VI—48村所) ネアキナガハナアブ(10/V—48村所)

#### (2) カバンボ科

ケリウジカバンボ(1/VI—48村所) マダラカバンボ(1/VI—48村所) ノヒラカバンボ(1/VI—48村所)

#### (3) ツリアブ科

クロバネツリアブ(10/VIII—48尾股)

#### (4) ムシヒキアブ科

シオヤアブ(20/V—48村所) アシナガムシヒキ(30/V—48村所) ムシヒキアブ(30/V—48村所) オオイシアブ(1/VI—48上米良)

#### (5) アブ科

アカウシアブ(20/VII—48村所、10/VIII—48尾股) ヤマトアブ(20/VII—48村所、10/VIII—48尾股) イヨシロオビアブ(7/VIII—48村所、10/VIII—48尾股) キスヂアブ(20/VII—48村所、3/VI—48二軒橋) ヨスデメクラアブ(15/V—48村所)

#### (6) フンバエ科



ヒメフンバエ (30/V—48村所)

(7) ハリバエ科

セスデハリバエ (15/V—48村所) シマハリバエ (30/V—48村所) カイコウ  
ジバエ (30/V—48村所)

(8) イエバエ科

イエバエ (30/V—48村所) キンバエ (30/V—48村所) クロバエ (30/V—48村  
所)

(9) シマバエ科

シマバエ (30/V—48村所、3/VI—48二軒橋、瓢丹淵)

(10) サシバエ科

サシバエ (30/V—48村所、1/VI—48上米良)

(11) カ 科

オオクロヤブカ (30/V—48村所) アカイエカ (30/V—48村所) シナハマダ  
ラカ (20/VII—48村所)

(12) ブユ科

*Simulium* sp. (1/VI—48村所、上米良)

(13) スカカ科

*Culicoides* sp. (20/V—48村所)

B 膜 翅 目

(1) ミツバチ科

クマバチ (30/V—48村所、1/VI—48市房山) ミツバチ (30/V—48村所) ト  
ラマルハナバチ (30/VII—48尾股) クロマルハナバチ (1/VI—48村所) バラ  
ハキリバチ (20/VI—48村所)

(2) スバメバチ科

モンズバメバチ (10/VI—48村所) スバメバチ (30/V—48村所) クロスバメ  
バチ (30/V—48村所) フトフタオビドロバチ (20/V—48村所) クロバネド  
ロバチ (20/V—48村所) コアシナガバチ (20/V—48村所) キボシアシナガ  
バチ (2/VI—48村所)

(3) ツチバチ科

ハラナガツチバチ (30/V—48村所)

(4) ベツコウバチ科

ベツコウバチ (1/VI—48村所)

(5) セイボウ科



オオモイボウ (15/V—48村所)

(6) アリ科

クロオオアリ (30/V—48村所、1/VI—48市房山) ムネアカオオアリ (1/VI—48市房山) トゲアリ (1/VI—48市房山)

C 鞘翅目

(1) クワガタムシ科

ヒラタクワガタ (10/VI—47村所)

(2) コガネムシ科

カブトムシ (10/VI—47村所) ナミコガネ (10/VI—47村所) コハナムグリ (30/V—48村所、1/VI—48上米良) キイロコガネ (10/VI—47村所、1/VI—48上米良) サクラコガネ (10/VI—47村所) アカマダラコガネ (10/VI—47村所 10/VIII—47二軒橋) セマダラコガネ (30/V—48村所、10/VIII—47瓢丹淵)

(3) タマムシ科

タマムシ (10/VI—47村所、10/VIII—48尾股) ウバタマ (10/VI—47村所) フオマダラタマ (2/VI—48村所)

(4) オサムシ科

オオアトホシゴミ (2/VI—48村所) コウヤ (10/VI—47村所) マルガタゴミ (10/VI—47村所)

(5) ハンミヨウ科

ナミハンミヨウ (10/VI—47村所、20/VIII—48尾股)

(6) ゲンゴロウ科

ナミゲンゴロウ (10/VI—47村所、) シマゲンゴロウ (15/V—48村所)

(7) ミヅスマシ科

オオミヅスマシ (10/VI—47村所)

(8) シデムシ科

ベッコウヒラタシデムシ (2/VI—48村所、10/VIII—48尾股)

(9) テントウムシ科

テントウムシ (1/VI—48村所、20/VIII—48尾股) ナ、ホシテントウ (30/V—48村所) ヒメカメノコテントウ (10/V—48村所)

(10) ゾウムシ科

オオゾウ (1/VI—48村所)

(11) ゴミムシダマシ科

クロキマワリ (10/VI—47村所)

(12) ホタル科

ジヨウカイボン (10/Ⅵ-47村所) ゲンジボタル (10/Ⅵ-47村所) ヘイケボタル (12/Ⅵ-48村所)

(13) カミキリ科

ゴマダラカミキリ (10/Ⅵ-47村所、20/Ⅷ-48尾股) ラミーカミキリ (10/Ⅵ-47村所) ミドリカミキリ (20/Ⅴ-48村所) ベニカミキリ (20/Ⅴ-48村所)

(14) ハムシ科

ウリハムシ (10/Ⅵ-47村所、10/Ⅷ-47二軒橋) クロウリハムシ (50/Ⅴ-48村所)

D 鱗翅目

(A) 蝶類

(1) アゲハチヨウ科

アゲハチヨウ (10/Ⅷ-47二軒橋、30/Ⅴ-48村所、1/Ⅵ-48上米良) キアゲハ (10/Ⅵ-47村所) クロアゲハ (10/Ⅵ-47村所、1/Ⅵ-48上米良) ジヤコウアゲハ (1/Ⅵ-48村所、上米良、市房山) モンキアゲハ (10/Ⅵ-47村所) アオスジアゲハ (10/Ⅵ-47村所、10/Ⅷ-47二軒橋、30/Ⅷ-48尾股)

(2) シロチヨウ科

モンシロチヨウ (10/Ⅷ-47瓢丹淵、30/Ⅴ-48村所、1/Ⅵ-48上米良) ウスモンシロチヨウ (10/Ⅵ-47村所、1/Ⅵ-48上米良、30/Ⅷ-48尾股) キチヨウ (10/Ⅵ-47村所、1/Ⅵ-48市房山、30/Ⅷ-48尾股) ツマダロキチヨウ (18/Ⅵ-48村所) モンキチヨウ (3/Ⅵ-48村所、二軒橋)

(3) マダラチヨウ科

アカギマダラ (30/Ⅴ-48村所、1/Ⅵ-48上米良、市房山)

(4) ジャノメチヨウ科

ヒメジャノメ (30/Ⅴ-48村所、20/Ⅴ-48板谷) キマダラヒカゲ (10/Ⅵ-47村所、1/Ⅵ-48上米良) ヒメウラナミジャノメ (10/Ⅵ-47村所、1/Ⅵ-48上米良、3/Ⅵ-48二軒橋、瓢丹淵) クロヒカゲ (30/Ⅴ-48村所、4/Ⅷ-48尾股) コノマチヨウ (14/Ⅴ-48村所、1/Ⅵ-48上米良) クロコノマチヨウ (2/Ⅵ-48村所)

(5) タテハチヨウ科

アカタテハ (10/Ⅷ-47二軒橋、2/Ⅵ-48村所、7/Ⅷ-48尾股) ヒメアカタテハ (30/Ⅴ-48村所、1/Ⅵ-48上米良) ルリタテハ (17/Ⅴ-48村所) キタ

テハ (31/V-48村所) オオムラサキ (25/V-48村所) コムラサキ (25/V-48村所) クロコムラサキ (25/V-48村所) イシガケチヨウ (50/V-48村所、26/VIII-48尾股) ウラギンヒヨウモン (3/VI-48村所) ギンボシヒヨウモン (10/VI-47村所) ツマダロヒヨウモン (10/VI-47村所、10/VIII-47二軒橋 7/VIII-48尾股) クモガタヒヨウモン (30/V-48村所) ウラギンスズヒヨウモン (3/VI-48村所) メスダロヒヨウモン (10/VI-47村所、1/VI-48上米良) オオウラギンヒヨウモン (1/VI-48上米良、3/VI-48村所) ゴマダラチヨウ (30/V-48村所) ミスズチヨウ (7/VIII-48尾股) コミスズ (10/VI-47村所、1/VI-48上米良、市房山) ヒトスズチヨウ (3/VI-48村所) テングチヨウ (7/VI-48村所) ヒオドシチヨウ (1/VI-48市房山)

(6) シバミチヨウ科

シバミチヨウ (10/VI-47村所、5/VI-48二軒橋) ベニシバミ (17/V-48村所) ヤマトシバミ (17/V-48村所) ツバメシバミ (17/V-48村所) ムラサキシバミ (30/V-48村所、1/VI-48上米良) ウラギンシバミ (3/VI-48村所) ルリシバミ (27/VI-48尾股)

(7) セトリチヨウ科

イチモンジセトリ (30/V-48村所) ダイミヨウセトリ (1/VI-48村所) オオチャバネセトリ (10/VI-47村所) キマダラセトリ (27/V-48村所) ヒメキマダラセトリ (7/VIII-48尾股)

B 蛾 類

(1) ヤママコ科

オナガミヅアオ (7/VIII-48尾股)

(2) ヤガ科

オオシラホシアツバ (1/VI-48村所)

(3) シヤクガ科

ヒヨウモンエダシヤク (30/V-48村所、1/V-48上米良) ウメエダシヤク (30/V-48村所)

(4) トウガ科

ヨツボシホソバ (2/VI-48村所) キシタホソバ (30/V-48村所) アカスヂコケガ (30/V-48村所) ベニヘリコケガ (2/VI-48村所)

(5) メイガ科

ニカメイガ (10/V-48村所)

(6) マダラガ科

ウスバツバメガ (10/VI-47村所) オキナワルリチラシ (20/IX-48村所)

## E 毛 翅 目

### (1) カワトビケラ科

ヒゲカワトビケラ (30/V-48村所)

## F 長 翅 目

### (1) シリアゲムシ科

ヤマトシリアゲムシ (30/V-48村所)

## G 脈 翅 目

### (1) ヘビトンボ科

ナミヘビトンボ (17/V-48村所)

### (2) ウスバカゲロウ科

ウスバカゲロウ (7/VIII-48村所) モンウスバカゲロウ (7/VIII-48尾股)

## H 半 翅 目

### (1) セミ科

クマゼミ (1/VI-47村所, 10/VII-47二軒橋) ヒゲラシ (15/VII-48村所, 25/VII-48尾股) ミンミンゼミ (10/VI-47村所, 25/VII-48尾股) ハルゼミ (15/V-48村所) ツクツクボウシ (27/VIII-48村所, 10/VIII-48尾股) アブラゼミ (15/VII-48村所) ニイニイゼミ (10/VI-47村所, 5/VI-48二軒橋)

### (2) ミミゼミ科

ミミヅク (30/V-48村所)

### (3) ヨコバイ科

ツマゲロヨコバイ (2/VI-48村所) ツマゲロオオヨコバイ (30/V-48村所)

### (4) カメムシ科

アオクサガメ (30/V-48村所) ナガメ (1/VI-48村所) シラホシムラサキガメ (30/V-48村所) アカスデキンガメ (16/VII-48村所)

### (5) サシガメ科

モンシロサシガメ (50/V-48村所)

## I 蜻 蛉 目

### (1) ヤンマ科

オニヤンマ (10/VI-47二軒橋) ヒトスデサナエ (30/V-48村所, 27/VIII-48尾股)

### (2) トンボ科

シオカラトンボ (10/VI-47村所, 27/VIII-48尾股) オオシオカラトンボ

(30/V-48村所) ウスバキトンボ (10/VI-47村所、27/VII-48尾股) ナツアカネ (30/VI-48村所、25/VII-48尾股) ショウジョウトンボ (3/VI-48村所、25/VII-48尾股) タカネトンボ (25/VII-48尾股)

(3) カワトンボ科

ミヤマカワトンボ (25/VII-48尾股) ハグロカワトンボ (10/VI-47村所)

J 績 翅 目

(1) カワゲラ科

カワゲラー種 (25/VI-48村所)

K 直 翅 目

(1) バツタ科

イナゴ (20/VI-48村所) セスデツチイナゴ (3/VI-48村所) ナキイナゴ (3/VI-48村所)

(2) コオロギ科

スバムシ (20/IX-48村所、上米良) マツムシ (15/X-48村所)

(3) キリギリス科

キリギリス (27/VIII-48村所) クツムシ (24/IX-48村所) ウマオイムシ (7/VIII-48村所)

(4) ゴキブリ科

ナミゴキブリ (3/VI-48村所) チャバネゴキブリ (30/V-48村所)

(5) ケラ科

ケラ (30/V-48村所)

## II 總 括

以上採集した11目、58科、177種の昆虫(中種名不詳3)を掲げたが將來尙多數の昆虫が判明するであらう。今第1回分として茲に掲げた之等の昆虫について一、二述べれば次の様である。

- (1) 大多數のものが廣く日本各地に分布するものであるが、さすがに山地種が多い。
- (2) 西米良地方は冷涼な地方で、氣温も本縣としては可成低い所であるが南方系の昆虫も數種見出される。即ちモンキアゲハ、クロコノマチヨウ、イシガタチヨウ、オキナワリチラシ等で、村所地方は亦之等の昆虫の多産地として注目すべき地方である。



# 高岡本庄地方に於ける松喰虫に就いて

上 坂 名

本庄高等學校

私が松喰虫に就いて研究を始めたのは今年の5月であつた。5月より今日にかけての研究報告を述べて見よう。主な調査區域は高岡、本庄の町境にある境野の坂、及び私の家附近の害虫の加害状況である。坂と云つても長く且つ廣いので多くの困難を生ずると思つたので先づ兩區域の略圖を畫きそれに松の立木數を記入した。境野地方をさらに5區に分割し、私の家附近を2區に分割した似る所が多いのでまとめて述べて見る。

1區の松の總本數40本、被害木10本である。2區の總本數32本、被害木5本、5區の總本數37本、被害木10本。4區の總本數22本、被害木1本。5區の總本數37本、被害木1本であり私の調査區域内で一番輕少なる區である。私の家附近では、1區の總本數90本、被害木23本、2區の總本數81本である。以上は境野（便宜上我が家附近を伊勢原といふ）及び伊勢原の立木の被害木との割合である。

次に各害虫の加害状況に移つて見よう。始めにキイロコキクロヒであるがこれは枯木には殆んどその姿を認めないが私の見た所の健全な立木にでもほとんど全部穿入している。これは主に枝部であつて、幹に多數群生するのは稀であつた。この虫について不思議に思つたのは他の害虫が穿入している木には必ずこれが穿入しており、又これが穿入していない木には他の虫が穿入していないことである。この虫を認めたのは7月10日に成虫を3匹、9月15日成虫2匹幼虫1匹、10月2日枯木の枝と健全なる木の枝とがすれ合つた所に5匹、認めたのは小指大から太指大の枝が多く直径1耗内外の孔を開き、皮下を喰ひ破り後に髓に向つて喰害している。

次はマツノキクヒムシである。これは枝幹根と所嫌わず喰害しており、多數群生しているのでその加害も又大である。この喰害方法は二通りある。一つは成虫が幹に穿孔し形成層を縦に約5糎位に喰しいわゆる母孔を作るこれに産卵するのである。産卵された卵は孵化し母孔より左右に向つて喰害する。これはヒバノキクヒムシと同じ喰痕である。一つは成虫が飛來穿孔しその地點より四方に擴がる如く幾條もその不規則な喰痕を示すものである。前者は主に5月以降6月上旬にかけてのものであり。後者は9月より現在にわたるものである。この虫は一般に多くて到る所で見るものであるが特に枯死の状態にある木

に多く見るのである。私が見た所では一ヶ所に成虫 15 匹を認めたのが最後でその月日は10月18日であつた。

トビイロカミキリは一般の天牛科に屬する害虫と何等變つた所がないが(加害状況)春季に羽化した成虫は直ちに他の木に産卵する。孵化した幼虫は徐々に孵化地點を喰害し大になるに従つて活潑なる運動を續け、巾廣く且つ早く上部或は下部に向つて喰害して行くのである。そして大体9月中旬から10月下旬にかけて産卵附近より約五種位上部より樹芯に向つて穿孔して行く。直徑約一種位。幼虫の体長3種内外である。樹髓部に喰入つた幼虫は上部に向つて7乃至10種位喰害する。そしてこの位置にて越冬するのである。大体体長も長く食慾も旺盛なる故に少數ではあるが、それがあたえる害は他と比較にならぬ程大である。私の見た所の喰害圖を單位で表はせば平均長さが31.5種、巾が五種、深さ三耗となります。一寸忘れたがこの虫の潜伏位置は幹の中部である。

最後にシラホシザウムシであるが、これがあたえる所の害は大したものではない様な気がする。何故ならば、これが穿入した木は殆んど枯死しており、腐敗物に寄生する所のシデネシ科の虫が多く寄生しているので分る。潜伏位置は幹の下部で厚皮に直徑五耗内外の孔を開いている。これを認めたのは10月10日が最初でありこの時成虫を2匹、幼虫を3匹であつた。これ以後たびたび見かけるが、今年の冬が暖い故か12月にはいつでも皮下には多くの幼蟲を見た。喰害痕は縦横無盡に「みゝす」がはつた様である。

以上で私の調査を終つたが未だ日數も少く調査に関する参考書もなかつたので唯自分の實際に見た事、思つた事を書いたのである。それ故獨斷的な所があると思ふ。皆様の御批判を願ひ、今後この研究調査を正しく續行し早くその正確な結果を得たいと思つている。

9月30日に不明の蟲を見付けたが未だに分らない。これに就いても早くその名を知りたいと思つている。

# 日本腦炎と宮崎縣の蚊類

松 澤 寛

宮崎大學生物學教室

は し が き

醫者でも醫學者でもない私が人間の病氣のことについて書くことは眞に不適當であるが、専門勉強の傍ら衛生害虫の調査研究を行つているので、日本腦炎に關する常識的なものと合して本縣の蚊族に關する調査の一端を述べる。

## 1 日本腦炎という病氣

一種の Virus によつて起ると言われる日本腦炎は、古くから我國にあつたらしいが、之が一疾患として認められる機になつたのは大正8年頃で、又法定傳染病の取扱をする機になつたのは極く最近のことである。

本病は極東に廣く分布し、日本の外佛印、中國、台灣、沖繩、朝鮮、滿洲、シベリア及沿海洲等に擴つている。世界各地に類似の流行性腦炎がある様で、就中北米のセント・ルイス腦炎、濠洲のX病、ロシアの森林腦炎（春夏腦炎）等有名で、アフリカ中部にも同様の疾患があるらしい。

本病の潜伏期間はよく分らないが、種々の程度の高熱を以て發病し、頭痛、食慾減退時には嘔吐を催すことがある。熱の上昇につれて意識は次第に不明瞭となり、臆言を發したり、興奮、不安の狀を呈したりする。また上下肢、項部の硬直、昏睡状態に陥る事も稀でない。高熱は數日間稽留して急に又は徐々に解熱し、微熱を繼續する。發病後10日内外に死亡する者が最も多く、極期を經過した良好な者は其後次第に意識恢復し、強直もとれて來るが全治には20日以上を要する様である。

實際には死亡率は20~40%と言われるが、一般に老人に高く、又罹病率も老人に高い様である。夏の氣温の高い時に發生が多いが、日本に於いては南部地方に多少流行が早い様である。

日本の馬腦炎が日本腦炎と全じ病源によつて起ることが城井氏によつて唱えられているが、近來北米のセント・ルイス病も亦馬を犯すことが明らかになつた。反對に動物の流行性腦炎であつて人間にも感染するものもあつて、此種の疾病はなかなか面倒である。

昨年（1948）は全國的に本病の發生が多かつた様で、宮崎縣にも多數の患者が發生した。9月30日迄に届出のあつた患者數は62名の多きに上り（眞正39名疑似23名）内17名が死亡した。本年（1949）年は眞正、疑似合して72名、中25

名が死亡した。

## 2 感 染 経 路

本病源体の感染経路については、直接感染即ち患者の泡沫飛散と、蚊による媒介感染の2経路が考えられているが、最近では後者が相當に有力の様である。之は昭和8年に三田村及山田兩氏によつて着目され、其後多くの研究がなされた結果、益々有力な説として認めらるゝ様になつた。

夏季に於ける自然の蚊からVirusの證明せられたものはアカイエカ、コガタアカイエカの2種であるが、人工的にはこの2種の外更にヒトスジシマカ、トウゴウヤブカ、ヤマトヤブカ、オオクロヤブカ、シナハマダラカ等有毒蚊となり得ることが知られている。最近では尙鳥獸に寄生するダニ類も媒介者となりうる事が豫想されるに至つたが、其他の吸血昆蟲の中にも或は媒介者が存することかも知れない。

## 3 宮 崎 縣 の 蚊 類

宮崎縣の蚊類については、一昨年來私が暇々に調査をすゝめてゐるが、未だ左程多種類のものを實見していない。之迄に明かにし得たものは次の8種(中1種は未査定であるが、上述の如く蚊による媒介が近來益々重要視されている折柄、大方の注意を喚起したい。

1. *Culex (Culex) pipiens* var. *palles* Coquillet (アカイエカ)
2. *Culex (Culex) tritaeniorhynchus* Giles (コガタアカイエカ)
3. *Aedes (Finlaya) japonicus* Theobald (ヤマトヤブカ)
4. *Aedes (Finlaya) togoi* Theobald (トウゴウヤブカ)
5. *Aedes (Stegomyia) albopictus* Skuse (ヒトスジシマカ)
6. *Aedes (Stegomyia)* sp. (種名未査定)
7. *Armigeres (Armigeres) obturbans* Walker (オオクロヤブカ)
8. *Anopheles (Anopheles) hyrcanus* var. *sinensis* Wiedemann (シナハマダラカ)



# オキナワルリチラシ *Eterusia aedea* Clerk に就いて

中 武 千 治

宮崎縣にオキナワルリチラシ *Eterusia aedea* Clerk の産することは既に豫想せられていたが確實なる記録は未だなされていない。唯江崎悌三博士の論文「隠岐に於ける注目すべき二三の昆虫」(動物學雜誌, vol.53, No.6, 1941)の中に白水隆氏の談によつて宮崎縣に産することが記録されているが産地等も不明で委しい記録はない。

筆者は本年(昭23)9月20日兒湯郡西米良村村所に於いて本種の雌を採集したので、いよいよ宮崎縣に産することが明瞭となつた。同日は他に1頭を發見したが捕獲することが出来なかつたけれ共村所附近には相當棲息するのではないかと思う。

本種は之迄に臺灣、沖繩の外、福岡(豊前)筑前沖ノ島、對島、隠岐、和歌山(紀伊)奈良市等に産することが記されているが、宮崎縣(村所)にも確實に産し、また自然的條件を考へて、鹿児島縣にも産するのではないかと思う。米良地方の昆虫相に關しては昨春より調査を行つているが、(本號にその第1報を報じてゐる)今後注目すべきものが相當見出されるのではないかと思う。南方系の昆虫として村所附近にはモンキアゲハ、イシガケチヨウ、クロコノマチヨウ等の蝶類をあげる事が出来るが、何れもこの地方に多産する。

文献其他について御教示下された九大農學部白水隆氏に共同研究者松澤板橋兩氏と共に感謝の意を表する(17.10.1948.)

## 参 考 文 献

- 1, 三宅恒方(1907) Annot. Zool. Jap. 6(3). 163—217
- 2, // ( // ) 動物學雜誌, 19(220). 37—41
- 3, 江崎悌三(1917) 名和靖還歴紀念論文集, 85—86
- 4, 堀 浩(1933) 福岡博物學雜誌, 1(2). 170—176
- 5, 前川雅雄(1934) 關西昆虫雜誌, 2(1) 17—18
- 6, 竹崎敏夫(1936) 自然と趣味, 6(2), 87—89
- 7, 坪井武夫(1939) む し, 12(2), 103
- 8, 江崎悌三(1941) 動物學雜誌, 53(6), 303—305
- 9, 松澤 寛(1948) 教育の研究, (1), 66—69
- 10, 松澤寛・中武千治・板橋敏光(1949) 宮崎リンネ會報, (15),



# 電話地下ケーブルに障害を與える昆虫

中 島 茂・清 水 薫

宮崎農林専門學校

過去に於ける地中の電話ケーブルに障害を與える昆虫として見聞したものをあぐれば次のようである。

時 期	場 所	種 名
1929~1931	東海道沿線……………	フタツノナガシクイ
1934	前仙台遞信局管内……………	ハラジロカツテブシムシ
1943~1945	前東京遞信局管内……………	シロスジカミキリ
1947	前青森熊本遞信局管内……………	カミキリ及タママシ類
1948	前廣島遞信局管内……………	ウバタママシ

其の後前熊本遞信局管内の都城、飯野間に障害が頻發して、障害部に動物の齒痕を認めるのみでいづれの種類に屬する動物なるかは不明であつたが、障害箇所は松林を通過する所か、又は松の根に接近した處に限定して居る事實よつて見て、松樹と關係を有し且地下部に棲息し松の根に添ふて活動する昆虫によるものと推定し、1947年以來研究を初めずでにカミキリ科に屬するクロガミキリ (*Spondylis buprestoides* Linnaeus) の幼虫による加害であることを明かにすることができた。因みに本ケーブルは14對搬送布ケーブルにて、戦時中に製作されたものである。

本研究は筆者等が前熊本遞信局の依頼によつて行つたもので、前熊本遞信局工務部の關係各位並に前宮崎電氣通信工事局の援助によつて行つたことを記し深甚なる謝意を表す次第である。尙本研究の結果は後日一括し發表するがここには其の結果の要点を報告するに止めて置きたい。

## Ⅰ 虫害に關する研究

- (1) 昆虫に因る地下電話ケーブルの障害は近來に到つて前熊本、廣島、青森遞信局管内に頻發して居て、之等は主にクロガミキリ幼虫とウバタママシ幼虫に因る虫害である。
- (2) 元來クロガミキリ幼虫及びウバタママシ幼虫の喰餌は松樹の地下部であるが、喰餌の不足するときはケーブルの鉛被を喰害する。従つて該虫に因る障害は松樹林の地帯に多い。
- (3) クロールピクリンの該虫に對する燻蒸は最も有効で、地上に於てはクロ

ールピクリンの標準使用濃度にて100%の殺虫力を示し得る。

- (4) ポット（高さ33cm 直径29cmの陶器製圓筒）内に於てのクロールピクリンの使用は30ccにて100%の殺虫力である。
- (5) クロールピクリンの垂直的及び水平的の地中殺虫有効範囲は50cm内外である。
- (6) DDTは10%粉劑が最も有効で乳劑として殺虫有効限度は0.1%と見る。
- (7) クロカミキリ幼虫を實驗的に本ケーブルに接觸し24時間（平均温度16°C）放置中に於て之を  $5\frac{2}{\text{mm}}$  に喰害することを確認してゐる。
- (8) クロカミキリ幼虫は土中（平均温度10.1°C）にて30cmも移動する個体があるので、該虫の活動期には可成の移動力を有するものと考えられる。

## II 虫害に關する對策

- (1) 本ケーブルを新設する際に被害の恐れある地帯は間接埋設が安全である。
- (2) 本ケーブル既設のもので被害地帯に屬するものの該虫驅除にはクロールピクリンの注射による熏蒸とDDT乳劑の撒布とが有効である。
- (3) クロールピクリンは、比較的古い伐株附近の熏蒸に、DDT乳劑は比較的新しい伐株の地際部に使用すべきである。
- (4) 本ケーブル防虫には防虫陶器管を使用し更に1防虫區間の兩端、陶器管の各端部内面にDDT粉末（10%）9,除虫菊1の割合に混じた藥劑500grを填充し陶管外部にはDDT粉劑100grを撒布するを要する。
- (5) クロールピクリンはケーブルより30cm上方で且つケーブルより15cm左右の千鳥型に片側の距離1mづつ隔てて注入するがよい。
- (6) 1948年以降の伐株は剥皮しDDT乳劑0.2%液を撒布せねばならない。
- (7) 都城、鹿児島間の被害の恐れある地帯208,000mに對しては陶器管に依る防虫工事を必要と認める。
- (8) 都城、飯野間の既設ケーブルに對しては少くとも、18,321mの間はクロールピクリンの注入を行ひ、DDT乳劑（0.2%液）は3,915mの間、伐株4,049について撒布すべきである。

（宮崎大學應用昆虫學教室にて March 1950）

# 光週反應をする植物

中山至大

宮崎師範學校

植物は明暗（晝夜）の相對的長さに對して一種の反應をする。此の現象を光週律（Photo-periodism）と云う。

普通光週律と云う場合は主に植物の生殖器官が反應する場合が取上げられて居るが、落葉・休眠・地下莖の肥大・若返り等にも關係する。此處には生殖器官の反應如何によつて植物を分けて見ようと思ふ。

被子植物では草本はよく反應するが1・2年性草本は多年性草本に比して反應するものが多い。即ち日長の長い場合に開花する長日植物・日長の短い場合に開花する短日植物・日長の長短に感じない中間植物（無感植物）の3群に分けられる。次に各群の代表的植物をあげよう。

長日植物 ヒメジヨオン・ホウレンソウ

短日植物 コスモス・アサガオ・オナモミ

中間植物 ノボロギク・ハコベ

木本植物の生殖器官は灌木に於ては反應するものが多少認められてゐるが、喬木では今の所認められてゐない。Maschkov (1935) によると暖地性のニセアカシヤをレニングラード（長日）で栽培した所凍害を受けた。これを短日處理した所耐寒性を増して凍害をまぬかれたと言う。又 Kramer (1936) によるとトネリコ等數種の植物を長日状態におくと休眠期を短縮出來ると云う。

此様に生殖器官（花・果實）は反應しないから喬木は無感植物に屬する。

シダ植物の眞シダ類は未だ實驗報告が無いから判らない。一般に多年性植物は生殖器官だけから見ると、反應するものが少いから、筆者の考えではおそらく無感植物であらうと思ふ。小囊シダに屬する陸生シダはKaufhold (1941) によると、反應は無いと云う。

筆者 (1941) は「雜草の光週律」研究の際、水生シダに屬するサンショウモを驗したのであるが、此植物は鋭敏な短日植物であることが判つた。即ち子囊果の形成は、短日區（8時間）は長日區（24時間）・自然區（約14時間30分）に比べて約30日早かつた。短日區は處理後10日で、子囊果を明瞭に見る事が出来る。子囊果の直徑0.5~0.9mmに發育する。

短日處理回数何回で後作用（after effect）を示すか、即ち限界回数を調べた所、短日處理回数3回の場合50%、5回の場合約90%の反應を示す事が判つた。

蘇苔植物のゼニゴケに就いては、Wann (1925)、Voth及びHamner (1940)、Kaufhold (1941) によると長日植物である事が判つた。

即ち藏精器・藏卵器は短日区よりも長日区の方が早く成熟する。

葉状植物の硅藻は、Rieth (1939~1940) によると日長の長短の影響はうけぬと云われる。1920年光週律が発見されて今日まで大体以上の研究がされて居るが、今後の研究で反應のある新しい植物が澤山判る事と思う。(2. 20. 1949)

## 宮崎縣の追加すべき虻類

市 場 利 哉

宮崎農林専門學校

さきに松澤氏 (1948) が本縣産の虻として11種を發表したが、その後同氏及び筆者の調査により尙追加すべきもの5種を得たので、こゝに追加發表する。

1. *Tabanus (Tabanus) cordiger* MEIGEN ヒメシロフアブ
2. *Tabanus (Tabanus) miyazima* RICARDO シロアシアブ
3. *Tabanus (Tabanus) chrysurus* LOEW アカウシアブ
4. *Tabanus (Tabanus) iyoensis* SHIRAKI イヨシロオビアブ
5. *Tabanus (Ochrops) sp.* キイロアブ一種

以上の如くであるが、この中シロアシアブ、アカウシアブ、イヨシロオビアブは本縣の山間地帯に産しその數も少くないものゝ様である。他の2種は平地にも多く産し、キイロアブ一種はホルバートアブと混じて棲息し、又よく酷似せる種であるが同一種とすることの出来ない差異がある。



## 宮崎縣產植物目錄補遺(Ⅱ)

平 田 正 一

宮崎農林專門學校

1937年日野及遠藤兩氏に依つて發表の宮崎縣產植物目錄に昨年55種類を追加したが、更に今回93種9變種1亞變種計103種を追加する。既發表のものと合して158種類を追加することになる。

### コケシノブ科 (Hymenophyllaceae)

ホソバコケシノブ (酒谷村、Ⅱ 6,—48)、オホコケシノブ (酒谷村、Ⅱ 6,—48)、アテホラゴケ (酒谷村、Ⅱ 6,—48)

### ウラボシ科 (Polypodiaceae)

ヌリトラノヲ (三納村、Ⅷ 5,—48、瀧一郎)、メヤブツテツ (米良村板谷Ⅱ 3,—47、松澤寛)、ミヤジマシダ (北郷村猪八重、Ⅱ 4,—48、酒谷村、Ⅱ 6,—48)、シロヤマシダ (北郷村猪八重、Ⅱ 4,—48)、イハヘゴ (米良村村所、Ⅱ 5,—46、小林町、Ⅹ 17,—47、永井彪) オナガウラボシ (三納村、Ⅷ 10—48、瀧一郎、酒谷村、Ⅱ 6,—45)、シマハチジャウシダ (三納村吉田、Ⅷ 10,—48、瀧一郎)、オホバアマクサシダ (北郷村猪八重、Ⅱ 4,—48)、オトコシダ (北郷村猪八重、Ⅱ 4,—48)

### ヒユ科 (Amarantaceae)

ヤナギイノコヅチ (瓜生野村、Ⅱ 8,—48)、ツルノゲイトウ (宮崎市大淀驛、Ⅱ 4,—48)、ヒユ (宮崎市、Ⅱ 9,—48)、ハリビユ (住吉村、Ⅹ 10,—48)

### ヤマゴバウ科 (Phytolaccaceae)

ヤウシユヤマゴバウ (下北方、Ⅹ 5,—47)

### キツネノボタン科 (Ranunculaceae)

ヤマトリカブト (青井岳、Ⅳ 27,—41、若林重道、川南村、Ⅱ 15,—48)

### ブナ科 (Fagaceae)

ブナノキ (市房山、Ⅱ 3,—46、霧島山、Ⅱ 24,—46)

### タデ科 (Polyganaceae)

ウラジロオホイヌタデ (宮崎市、Ⅱ 3,—48)

### モクレン科 (Magnoliaceae)

オホヤマレンゲ (霧島山大浪池、Ⅱ 7,—41、若林重道、市房山、Ⅷ 30,—48)

森本辰雄)

マンネングサ科 (Crassulaceae)

ツメレンゲ (都井岬、Ⅹ 6, -48、福岡貞敏) ヒメレンゲ (日向ライン、Ⅴ 16, -48)

バラ科 (Rosaceae)

コゴメウツギ (霧島山、Ⅵ 9, -47)、クサボケ (宮崎市、Ⅴ 25, -41、霧島中岳、Ⅶ 7, -47) バライチゴ (杉安、Ⅹ 23-49)、クサイチゴ (市房山、Ⅹ 3, -46、都井岬、Ⅵ 8, -46)、エビガライチゴ (霧島山白鳥、Ⅸ 24, -46)

マメ科 (Leguminosae)

オホバヌスピトハギ (宮崎神宮神苑、Ⅷ 30, -48、川越好)  
ヤブマメ (霧塚山、Ⅹ 21, -41、若林重道、瓜生野村、Ⅹ 9, -48)、ニハフヂ (双石山、Ⅹ 26, -40、霧島山、Ⅵ 7, -47)、クサフヂ (崩野峠、Ⅹ 17, -41)

カタバミ科 (Oxalidaceae)

ムラサキカタバミ (都井岬、Ⅴ 20, -41、若林重道、宮崎市、Ⅹ 9, -48)

マツカゼサウ科 (Rutaceae)

シマクロキ (尾鈴山、Ⅷ 11, -46、都井岬、Ⅶ 8, -46)

ヒメハギ科 (Polygalaceae)

ヒナノカンザシ (宮崎市、Ⅸ 15, -47)

ミヅハコベ科 (Callitrichaceae)

アハゴケ (宮崎市、Ⅳ 20, -46)

ハゼノキ科 (Anacardiaceae)

ハゼノキ (双石山、Ⅹ 26, -40、岩戸村、Ⅹ 19, -41)

カヘデ科 (Aceraceae)

コハウチハカヘデ (霧島山大浪池、Ⅸ 23, -46)

トチノキ科 (Hippocastanaceae)

トチノキ (高千穂町、Ⅹ 19, -41)

トウダイグサ科 (Euphorbiaceae)

タカトウダイ (關之尾、Ⅵ 20, -48)

ブドウ科 (Vitaceae)

ヤマブドウ (高千穂町、Ⅹ 19, -41)

アフヒ科 (Malvaceae)

フユアフヒ (宮崎市、Ⅴ 21, -48、森介計)

サルナシ科 (Dilleniaceae)

マタタビ (霧島山、Ⅵ 7, -47、北川村、Ⅶ 15, -47、酒谷村、Ⅸ 7, -48)

オトギリサウ科 (Guttiferae)

トモエサウ (北川村、Ⅹ 11, -56、吉江清朗、都井岬、Ⅵ 7, -46)

ヂンチヤウゲ科 (Thymelaeaceae)

コセウノキ (双石山、Ⅳ 24, -41、若林重道、三股村、Ⅷ 6, -48)、ガンビ  
(双石山、Ⅹ 26, -40、尾鈴山、Ⅹ 8, -46、青井岳、Ⅹ 17, -46)

アカバナ科 (Oenotheraceae)

チヤウヂタデ (宮崎市 Ⅹ 8, -48)、オホマツヨイグサ (宮崎市、Ⅷ 6, -48)、  
イハアカバナ (酒谷村、Ⅸ 6, -48)

ウコギ科 (Araliaceae)

トチバニンゲン (双石山、Ⅴ 5, -48、藤井一美、三股村、Ⅷ 6, -48、酒谷  
村、Ⅸ 7, -48)

サクラサウ科 (Primulaceae)

ミヤマコナスビ (高千穂町、Ⅷ 10-49松浦彰一)

イチヤクササウ科 (Pirrolaceae)

ウメガササウ (双石山、Ⅸ 9, -48 松浦彰一)

ヤブカウジ科 (Myrsinaceae)

カタチバナ (鶴戸村、Ⅵ 6, -46)、ハマウド (油津町、Ⅴ 8, -47)、ヒ  
カゲミツバ (崩野峠、Ⅹ 17, -41、祖母山、Ⅹ 18, -41)

ツツジ科 (Ericaceae)

ベニドウダン (霧島山、Ⅵ 8, -47)

イソマツ科 (Plumbaginaceae)

ハマサジ (細島、Ⅴ, 23, -48)

ハヒノキ科 (Symplocaceae)

カンザブラウノキ (北郷村猪八重、Ⅸ 4, -48)

リンダウ科 (Gentianaceae)

ハルリンダウ (小林町、Ⅳ 10-48 永井アキラ)

クマツヅラ科 (Verbenaceae)

オホルリソウ (酒谷村、Ⅸ 6, -48)

クチビルバナ科 (Labiatae)

タニジヤコウサウ (酒谷村, IX 6, -48)、ミヅトラノヲ (下北方, IX 14, -41、日野巖、清武村, X 7, -47、川南村, X 15, -48)、シモバシラ (双石山, IX 21, -41、日野巖、北郷村, IX 5, -48、川南村, IX 16, -48)

ゴマノハダサ科 (Scrophulariaceae)

アブノメ (宮崎市, VIII 29, -41)、アゼナ (宮崎市, VIII 29, -41)、スズメノタウガラシ (宮崎市 VI 5, -48)、クチナシダサ (宮崎市, IX 5, -48)

キツネノマゴ科 (Acanthaceae)

スズムシサウ (宮崎市下北方, XI 14, -41、日野巖、本庄町, X 13, -48、森介計)

アカネ科 (Rubiaceae)

フタバムグラ (宮崎市, VIII 5, -48、森介計)、ヤマムグラ (霧島山, VI 8, -47)

スヒカヅラ科 (Caprifoliaceae)

ソクズ (富高町, V 25, -48、三股村, VIII 7, -48)、ゴマギ (川南村, VIII 16, -48)

キキヤウ科 (Campanulaceae)

サハギキヤウ (川南村, IX 16, -48)

キク科 (Compositae)

ヒゴタイ (三股村, VIII 6, -48)、オホヂシバリ (宮崎市, XI 9, -48)、タビラコ (妻町, IV 20, -47、宮崎市, V 10, -47)、ノコギリサウ (祖母山, X 18, -41)、コウモリサウ (霧島山, VI 8, -47)、アイノアキノノゲシ (青井岳, VI 22, -41、祖母山, X 18, -41)、ヤマアザミ (双石山, X 26, -40、都井岬, VII 9, -46、祖母山, VII 17, -46、霧島山, IX 23, -46)、ヒメヒゴタイ (米良村, XI 2, -46)

ホモノ科 (Gramineae)

ヒメアブラススキ (宮崎市, V 21, -41、尾鈴山 IX 9, -48、川越好)、コカリヤス (下北方, V 21, -41)、サヤヌカダサ (双石山 IX 23, -41、若林重道、瓜生野村, XI 9, -48)、ヌメリダサ (都農町, IX 9, -48)、チカラシバ (高千穂町, X 17, -41)、アオチカラシバ (川南村, X 8, -33、宮澤文吾、宮崎市, X 10, -48、生目村, XI 7, -48)



カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

カハラスガナ (小林町、Ⅱ 28, -48、永井彪)、オホアブラススキ (青井岳  
Ⅵ 22, -41)、クサスゲ (宮崎市、Ⅳ 20, -46)、ミツガヤツリ (小林町、ⅠⅩ  
28, -48、永井彪、ヒメテンツキ (小林町、ⅠⅩ 28, -48、永井彪)、ノギラン  
(尾鈴山、Ⅷ 11, -46)

テンナンセウ科 (Araceae)

ヒメウラシマサウ (市木村、Ⅱ 9, -47)

ビヤクブ科 (Stemonaceae)

ナベワリ (日向ライン、Ⅴ 16, -48)

ユリ科 (Liliaceae)

ツクバネサウ (鰐塚山、Ⅳ 20, -41、若林重道、霧島山、Ⅵ 8, -48、松浦彰  
一)、キチヂヤウサウ (鰐塚山、Ⅱ 19, -48、藤井一美)、アマナ (小林町、  
Ⅳ 30, -48、永井彪)

アヤメ科 (Iridaceae)

タレユエサウ (小林町、Ⅳ 5, -48、中村法祐)

ヒガンバナ科 (Amaryllidaceae)

キンバイザサ (都農町、Ⅷ 16, -46)

ヤマイモ科 (Dioscoreaceae)

カヘデドコロ (双石山、Ⅹ 26, -40)

ミヅワラビ科 (Parkeriaceae)

ミヅワラビ (住吉村、Ⅱ 12, -41、若林重道、宮崎市、Ⅹ 18, -48、藤井一  
美)

ラン科 (Orchidaceae)

ミヅトンボ (双石山、Ⅹ 26, -46)

註: 採集者名を示さざるものは著者の採集による。

# 兒湯郡三納村吉田附近の羊齒類

瀧 一 郎

宮崎師範學校

本目錄は筆者が昨年(1947)より調査採集した三納村吉田附近の羊齒類であつて、鑑定は日頃ねんごろにお教え下さる松澤寛氏と平田正一氏の御指導のもとに行つたものである。ここに兩氏に對し厚く感謝の意を表する。

## 目 録

### I, キジノオシダ科

モジノオシダ (片内 2/Ⅲ, -48 長谷板後 4/Ⅷ, -48)

### II, ウラジロ科

ウラジロ (吉田 23/Ⅻ, -47 後谷 4/Ⅰ, -48) コシダ (吉田 23/Ⅻ, -47 後谷 13/Ⅰ, -48, 宮下 15/Ⅰ, -48)

### III, カニクサ科

カニクサ (平野 5/Ⅷ, -48, 三納平野 11/Ⅷ, -48, 檜野 13/Ⅷ, -48)

### IV, ゼンマイ科

ゼンマイ (板後 4/Ⅷ, -48, 船塚 11/Ⅷ, -48, 吉田 23/Ⅻ, -47) シロヤマゼンマイ (お瀧 15/Ⅰ, -48, 後谷 6/Ⅵ, -48)

### V, リュウビンタイ科

リュウビンタイ (お瀧 23/Ⅺ, -48)

### VI, ハナヤスリ科

フエノハナワラビ (後谷 7/Ⅺ, -48)

### VII, ウラボシ科

フモトシダ (片内 2/Ⅲ, -48, 平野檜野、平郡 13/Ⅷ, -48, お瀧 23/Ⅺ, -48) イヌシダ (檜野、平郡、高三納 13/Ⅷ, -48) ホラシノブ (吉田 23/Ⅻ, -47) エダウチホンゲウシダ (長谷観音 13/Ⅺ, -48) シノブ (麓 10/Ⅹ, -48 吉田 8/Ⅻ, -48) ワラビ (板後 4/Ⅷ, -48, 吉田 3/Ⅻ, -48) イノモトソウ (吉田 23/Ⅻ, -47, 檜野平郡 13/Ⅷ, -48) オウバイノモトソウ (後谷 4/Ⅰ, -48, 片内 2/Ⅲ, -48, 板後 4/Ⅷ, -48, 唐仙 7/Ⅷ, -48, 久灰野 15/Ⅷ, -48) アマクサシダ (吉田 23/Ⅻ, -47, 平郡 13/Ⅷ, -48) オウバノハチヂヨウシダ (後谷 6/Ⅵ, -48, 長谷観音 13/Ⅺ, -48) オウバノアマクサシダ (後谷 6/Ⅵ, -48) シマハチヂヨウシダ (板後 4/Ⅷ, -48, お瀧

23/XI, -48) タチシノブ (宮下 15/I, -48, 久灰野 15/VIII, -48) ハコネ  
シダ (片内 2/III, -48) イワガネゼンマイ (久灰野 15/VIII, -48, お瀧 23/XI  
-48) イワガネソウ (吉田 23/XII, -47, 板後 4/VIII, -48) シシラン (板  
後 4/VIII, -48, 久灰野 15/VIII, -48) シシガシラ (宮下 15/I, -48, 片内 2  
/III, -48, 板後 4/VIII, -48, 檜野 13/VIII, -48) コモチシダ (吉田 23/XII, -47  
久灰野 15/VIII, -48, お瀧 23/XI, -48) オウカグマ (長谷観音 13/XI, -48)  
トラノオシダ (原田 11/VIII, -48, 吉田 3/XII, -48) ヒノキシダ (板後 4/VIII  
-48) スリトラノオ (久灰野 15/VIII, -48) クルマシダ (後谷 4/I, -48)  
ハマシダ (お瀧 23/XI, -48) ホウビシダ (お瀧 23/XI, -48) アオガ  
ネシダ (板後 4/VIII, -48) ヘラシダ (吉田 23/XII, -47, 宮下 15/I, -48,  
片内 2/III, -48, 唐仙 7/VIII, -48, 久灰野 15/VIII, -48, お瀧 23/XI, -48)  
ホソバシケシダ (お瀧 23/XI, -48) シケシダ (檜野 13/VIII, -48, お瀧  
23/XI, -48) ノコギリシダ (後谷 4/I, -48, 宮下 15/I, -48, 片内 2/III, -48,  
唐仙 7/VIII, -48, 久灰野 15/VIII, -48, お瀧 23/XI, -48) イヨクジャク  
(後谷 6/VI, -48) シロヤマシダ (お瀧 23/XI, -48) タニイヌワラビ  
(後谷 23/VIII, -48) クマワラビ (久灰野 15/VIII, -48) イワヘゴ (湯牟田  
13/VIII, -48, 久灰野 15/VIII, -48, お瀧 23/XI, -48) オウミツヂ (片内 2/III  
-48, 後谷 6/VI, -48) ナガバノイタチシダ (後谷 23/VIII, -48, お瀧 23/XI  
-48) ベニシダ (吉田 23/XII, -47, 後谷 4/I, -48, 片内 2/III, -48, 唐仙  
7/VIII, -48, 檜野, 高三納 13/VIII, -48, 久灰野 15/VIII, -48, 観音 13/XI, -48  
お瀧 23/XI, -48) トウゴクシダ (板後 4/VIII, -48, お瀧 23/XI, -48) マ  
ルバベニシダ (吉田 3/XII, -48) ナチクジャク (吉田 19/XI, -48) イタ  
チシダ (後谷 4/I, -48, 片内 2/III, -48, 唐仙 7/VIII, -48, お瀧 23/XI, -48)  
キヨスミヒメワラビ (久灰野 15/VIII, -48) ハシゴシダ (島田 11/VIII, -48)  
ハリガネワラビ (観音 13/XI, -48) ヤワラシダ (平郡 13/VIII, -48) ヒメ  
ワラビ (お瀧 23/XI, -48) イワヒメワラビ (お瀧 23/XI, -48) ゲジゲ  
ジシダ (高三納 13/VIII, -48, お瀧 23/XI, -48) イブキシダ (久灰野 15/VIII  
-48) ミゾシダ (吉田 23/XII, -47, 後谷 13/I, -48, 久灰野 15/VIII, -48  
お瀧 23/XI, -48) ホシダ (吉田 23/XII, -47, 宮下 15/I, -48, 片内, 2/III  
-48, 板後 4/VIII, -48, 船塚 11/VIII, -48, 原田 13/VIII, -48, 久灰野 15/VIII  
-48, お瀧 23/XI, -48) ホソバカナワラビ (吉田 10/VI, -48, お瀧 23/XI  
-48) オウカナワラビ (宮下 15/I, -48, 高三納 13/VIII, -48, お瀧 23/XI  
-48) オトコシダ (後谷 23/VIII, -48, お瀧 23/XI, -48) リヨウメンシダ

(後谷 13/I, -48、お瀧 23/XI, -48) イノデ (後谷 4/I, -48、唐仙 7/VIII -48、高三納 13/VIII, -48、久灰野 15/VIII, -48) ジュウモンジシダ (久灰野 15/VIII, -48) オリヅルシダ (後谷 6/VI, -48、お瀧 23/XI, -48) ヤブソテツ (後谷 4/I, -48、片内 2/III, -48、唐仙 7/VIII, -48、観音 13/XI, -48) アミシダ (後谷 23/VIII, -48) ミツデウラボシ (宮下 4/VIII, -48、久灰野 15/VIII, -48、麓 8/VIII, -48) タカノハウラボシ (久灰野 15/VIII, -48) ノキシノブ (後谷 13/I, -48、宮下 15/I, -48、年之守 11/VIII, -48) オナガウラボシ (久灰野 15/VIII, -48) スカボシクリハラン (吉田 23/XII, -47、後谷 4/I, -48、宮下 15/I, -48、板後 4/VIII, -48、久灰野 15/VIII, -48、お瀧 23/XI, -48) クリハラン (後谷 13/I, -48、宮下 15/I, -48、片内 2/III -48、板後 4/VIII, -48、唐仙 7/VIII, -48、お瀧 23/XI, -48) イワヒトデ (片内 2/III, -48、唐仙 7/VIII, -48、お瀧 23/XI, -48) ヤリノホクリハラン (板後 4/VIII -48) イワヤナギシダ (久灰野 15/VIII, -48) マメヅタ (後谷 23/VIII, -48、お瀧 23/XI, -48、吉田 3/XII, -48) ヒトツバ (宮下 15/I -48、片内 2/III, -48、板後 4/VIII, -48、久灰野 15/VIII, -48、お瀧 23/XI, -48)

以上 31属 81種



# 尾鈴山に於ける羊齒類の垂直分布に就いて

瀧 一 郎

宮崎師範學校

は し が き

筆者は今年(1948)11月28日から11月30日の3日間にわたつて尾鈴山の羊齒類の垂直分布を調査した。次にその結果を示してみる。今般は降雪の爲鑑定不能のものが二、三あつたがこれは後程の調査にまつ事にする。

最後に日頃懇篤なる御指導をたまわる松澤寛先生と平田正一先生に厚く御禮申し上げる。

種 類	海拔m							
	0	200	400	600	800	1000	1200	1400
イ フ ヒ ト デ	_____							
ト ラ ノ オ シ ダ	_____							
ハ シ ゴ シ ダ	_____							
マ ル バ ベ ニ シ ダ	_____							
ナ チ ク ジ ヤ ク	_____							
ヒ メ イ タ チ シ ダ	_____							
イ ノ モ ト ソ ウ	_____	_____						
コ モ チ シ ダ	_____	_____						
ホ シ ダ	_____	_____						
ヒ ト ツ バ	_____	_____	_____					
オウバイノモトソウ	_____	_____	_____					
ア マ ク サ シ ダ	_____	_____	_____					
タ チ シ ノ ブ	_____	_____	_____					
シ ケ シ ダ	_____	_____	_____					
ミヤマノコギリシダ	_____	_____	_____					
ヘ ラ シ ダ	_____	_____	_____					

0 200 400 600 800 1000 1200 1400

ホ	ラ	シ	ノ	ブ	_____				
イ	ヌ	シ	ダ		_____				
フ	モ	ト	シ	ダ	_____				
ゲ	シ	ゲ	ジ	ジ	_____				
ヒ	メ	ワ	ラ	ビ	_____				
ナ	ガ	バ	ノ	イ	タ	チ	シ	ダ	_____
ミ	ヅ	シ	ダ		_____				
カ	ニ	ク	サ		_____				
ク	リ	ハ	ラ	ン	_____				
ワ	ラ	ビ			_____				
シ	マ	ハ	チ	ヂ	ヨ	ウ	シ	ダ	_____
オ	ウ	カ	ナ	ワ	ラ	ビ			_____
ホ	ソ	バ	カ	ナ	ワ	ラ	ビ		_____
イ	ブ	キ	シ	ダ					_____
シ	ロ	ヤ	マ	ゼ	ン	マ	イ		_____
イ	ノ	デ							_____
イ	タ	チ	シ	ダ					_____
ク	マ	ワ	ラ	ビ					_____
ゼ	ン	マ	イ						_____
ヤ	ワ	ラ	シ	ダ					_____
イ	ワ	ヒ	メ	ワ	ラ	ビ			_____
イ	ワ	ヘ	ゴ						_____
ベ	ニ	シ	ダ						_____
ノ	キ	シ	ノ	ブ					_____
ウ	ラ	ジ	ロ						_____
シ	ノ	ブ							_____
キ	ジ	ノ	オ						_____

0 200 400 600 800 1000 1200 1:00

コ	ダ	シ	_____	_____
メ	マ	ヅ	ダ	_____
シ	シ	ガ	シ	ラ
ハリ	ガ	ネ	シ	ダ
サ	ジ	ラ	ン	_____
イ	ワ	ガ	ネ	ソ
ク	ル	マ	シ	ダ
ヌ	リ	ト	ラ	ノ
オ	ウ	ミ	ツ	デ
ヤ	ブ	ソ	テ	ツ
オ	ナ	ガ	ウ	ラ
タ	カ	ノ	ハ	ウ
シ	シ	ラ	ン	_____
オ	ウ	バ	ハ	チ
オ	ウ	カ	ダ	マ
ト	キ	ワ	シ	ダ
ヒ	ノ	キ	シ	ダ
ア	オ	ガ	ネ	シ
キ	ヨ	タ	キ	シ
ノ	コ	ギ	リ	シ
コ	バ	ノ	イ	シ
オ	ク	マ	ワ	ラ
タ	ニ	イ	ヌ	ワ
ジ	ユ	ウ	モ	ン
シ	ケ	チ	シ	ダ
ヒ	メ	ノ	キ	シ
フ	ユ	ノ	ハ	ナ

# 宮崎リンネ會記錄 昭和23~24年度

## I 總會並例會之部

第19回例會 2月21日

- 1, 微生物の生存競争 農專 外山信夫
- 2, 大陸の思ひ出 農試 近藤鐵馬
- 3, 懇談 所謂化ける動物の正体について 司會 第二高女 富永武義

第20回例會 4月17日

- 1, 宮崎縣の生物 農專 中島 茂
- 2, 足の裏 坂本龍七
- 3, 日本昆虫文學 師範 七條桂子
- 4, 生物採集の方法, 昆虫標本の作り方, 採集用具 農專 本會幹事

第21回例會 (兼昭和23年度總會)

5月15日

- 1, 松の倍数性 農專 野邊忠光
- 2, 新しい日向産硬質菌蕈數種に就いて 農專 平田正一

第22回例會 6月19日

- 1, 植物の刺戟作用 農專 森 介計
- 2, 採集品の紹介 農專 前井一美
- 3, コクザウ及びココクザウ

師範 松澤 寛

- 4, 採集回顧談 農專 脇坂幸雄
- 5, 人体腦の諸問題 田村忠雄

夏期講習會—8月11~13日

第一日 高校生徒研究發表會

- 1, 本庄地方の松の被害調査 本庄高校 堤 雄
- 2, 2-3の漢藥についての考察 本庄高校 渡邊綾子
- 3, 日食時に於ける植物と氣温

大宮高校 桐野一洋

- 4, 二十の扉司會 本庄高校 萱島 泉

第二日 青島採集會

第三日

- 1, 柑橘瘡痂病に就いて

本庄高校 島原輝男

- 2, 本縣の特徴ある害虫に就いて 農專 中島 茂
- 3, 座談會 司會 本庄高校 萱島 泉

第23回例會 9月18日

- 1, 植物漫談 宮崎種苗 矢野勇雄
- 2, ナマズについて 農專 奥野 博
- 3, 話の泉 宮中 四本正秋

第24回例會 11月20日

市内中學生徒研究發表會

- 1, 雌蕊の調査 宮中 横川春江
- 2, 雄蕊の研究 宮中 福永カチエ
- 3, 蚊の飼育 宮中 小坂八重子
- 4, タバコに就いて

大宮中 三窪千恵子

- 5, 滲透壓に就いて 大宮中 小川千代
- 6, 話の泉 司會 宮中 四本正秋
- 7, オキナハリチラシの紹介

師範 松澤 寛

- 8, 粘菌紹介 農專 平田正一
- 9, 粉乳につく昆虫の紹介

農專 中島 茂

第25回例會 1月22日

- 1, シベリアに於ける昆虫 川崎正義
- 2, 超短波處理に依る柑橘の影響と果



實バエに對するInfluenceの問題

本庄高校 萱島 泉

3, 地質學に就いて 師範 遠藤 尙

第26回例會 2月19日

1, 宮崎縣の植物分布 農專 脇坂幸雄

2, リンネ會と私 農專 關谷昭二郎

3, 科學トピック 師範 松澤 寛

4, 温室植物の紹介 農專 森 介計

5, 蛇に就いて 農專 市場利哉

第27回例會總會 4月23日

會長改選 農專 平田先生五選

會費年150圓に決定

第28回例會 5月28日

1, 縣下新産植物紹介 農專 平田正一

2, 縣内珍昆虫の紹介 農專 奥野博司

第29回例會 6日25日

1, 日長と植物 師範 中山至大

2, 馬鈴薯ヅアイラス病診斷

農專 平田正一

3, 陛下青島行幸の感想

農專 中島 茂

子供國 森山基次

第29回例會 7月30日

1, 貯藏穀物の害虫について

本庄高校 岡元和好

倉田濶司

2, 寄生植物調査 本庄高校 松尾良行

3, 本庄川岸の植物群落調査

本庄高校 田邊ミヲ

岩切イツ

夏期講習會 7月31日—8月2日

第1日

動物實驗:ヒドラの觀察, トノサマカ  
ヘル心臓の觀察 農專 清水 薫

第2日

植物實驗:顯微鏡永久標本の作り方,  
植物根莖葉の解剖觀察 農專 平田正一  
茶話會

第3日 本庄支部と高岡町にて合同採集

第30回例會 9月17日

教育映畫會 (縣社會教育課)

1, 明日の醫學

2, 科學教育博物談

3, 世界の食糧問題

4, 合衆國新西部

5, 農村共進會

6, 漫 畫

II 採 集 會 之 部

1, 青井岳 4月18日 參加者 33名

2, 日向ライン 5月16日 參加者40名

3, 綾部苗圃, 細島港及び伊勢ヶ濱

5月23日 參加者 25名

4, 生目神社 6月6日 參加者 24名

5, 青 島 8月12日 參加者 43名

6, 双石山 9月23日 參加者 35名

7, 勘八山 4月29日 參加者 16名

8, 宮崎神宮, 永源地 5月15日

參加者 24名

9, 霧島山 6月11—12日 參加者 30名

10, 高岡町 (本庄支部との合同採集)

8月2日 參加者 23名

11, 青井岳 9月25日 參加者 50名

12, 杉安, 穗北 10月23日 參加者 11名

### Ⅲ 生物研究發表

日時 昭和23年10月5日 會場 宮崎農專階段教室

講演

- |                      |      |         |
|----------------------|------|---------|
| 1、 稻の晩植栽培に於ける生育相     | 高鍋高校 | 長 友 有 人 |
| 2、 柑橘瘡痂病の調査          | 本庄高校 | 鳥 原 輝 男 |
| 3、 漢藥調劑の實驗と体験        | 本庄高校 | 渡 部 綾 子 |
| 4、 螢光燈の効力            | 大宮高校 | 桐 野 一 洋 |
| 5、 植物の細胞に就いて         | 高鍋高校 | 荒 木 悅 子 |
| 6、 東諸縣郡の竹の調査         | 本庄高校 | 豊 岐 繁 樹 |
|                      | 本庄高校 | 宮 部 雄 吉 |
| 7、 本庄地方に多く飼養される鶏について | 大宮高校 | 黒 田 修 吉 |
| 8、 玉葱細胞の原形質分離        | 大宮高校 |         |
| 9、 モンキアゲハの生活史        | 農 專  | 田 村 光 章 |
| 10、 スベリヒユの再生現象       | 農 專  | 森 介 計   |

受賞者

一等 鳥原輝男 二等 桐野一洋 三等 渡部綾子

日時 昭和24年11月13日 會場 宮崎大學農學部階段教室

講演

高等學校之部

- |                     |      |                    |
|---------------------|------|--------------------|
| カビ類について             | 大宮高校 | 猪 野 博              |
| 本庄川原の植物群落調査春秋の對稱試驗  | 本庄高校 | 岩 切 イツ子<br>田 邊 ミチヲ |
| 螢光誘蛾燈の効力及びこれに伴ふ諸研究  | 大宮高校 | 桐 野 一 洋            |
| マツノキイロコクイムシの生態學的研究  | 本庄高校 | 岡 元 和 好            |
| 井戸内より出たる生物に就いて      | 大宮高校 | 岡 元 政 司            |
| 葉脈標本製作法             | 大宮高校 | 太 田 泰 壽            |
| イモリの斑紋の地方變異の研究      | 本庄高校 | 鳥 原 滿 男            |
| 植物ホルモンが成長に及ぼす影響     | 大宮高校 | 高 尾 憲 明            |
| 環境の變化に伴ふ蝶の形態的變化について | 大宮高校 | 氏 川 忠 忠            |
| ニクバエの幼虫の光に對する研究     | 本庄高校 | 福 永 慧 惠            |
| 虫垂炎に就いて             | 大宮高校 | 熊瀬川 幸 子            |

中 學 校 之 部

- |            |       |         |
|------------|-------|---------|
| 花粉の形に就いて   | 宮 中   | 木 村 涼 子 |
| 昆虫類の特性に就いて | 大 宮 中 | 三 堂 守 行 |

私家の鶏の産卵數に関する調査	宮 中	宮 崎 泰 子
發芽に就て	大 宮 中	押 川 唯 信
植物の運動に就て	大 宮 中	高 橋 千 代

受賞者 高等學校之部	一等 氏川 忠	二等 岩切イツ子	邊田ミヲ
	三等 桐野一洋		
中學校之部	一等 押川唯信	二等 宮崎泰子	三等 高橋千代

### Ⅲ 生物採集品展覽會

日 時 昭和24年11月11日より3日間 會場 宮大農學部植物實驗室  
應募採集品

- 1、動物に関するもの 29点  
内譯 大宮高校 (11) 大湊高校 (6) 大宮中學 (9) 青島中學 (3)
- 2、植物に関するもの 7点  
内譯 大宮高校 (3) 清武中學 (1) 大宮中學 (3)

受賞者

- |    |                    |                   |
|----|--------------------|-------------------|
| 一等 | 氏川忠 (大宮高、昆虫)       | 山口研二郎 (大宮高校、昆虫)   |
|    | 三堂守行 (大宮中、昆虫)      |                   |
| 二等 | 湯田博夫 (大湊高、昆虫)      | 三好百合子 (大宮中學、貝類)   |
|    | 伊藤信雄 長友善美 (清武中、植物) | 古賀章靖 (大宮高、菌<br>蕈) |
| 入選 | 北川 鈴 (大宮中學、貝類)     | 小川千代 (大宮中、腊葉)     |

## 投稿についてのお願い

- (1) 題名 學校 名氏名を入れて，組上り1頁は約1000字ですから うまく頁を埋める様書きあけて下さい。
- (2) 文中の數字は主として算用數字(18, 25)を使用し，横文字は活字体で明瞭に，左から右へ横書きにして，平假名で。動植物の種名，洋語は片假名で書いて下さい。
- (3) 學生，生徒の投稿は先生に見て頂いて校正後提出して下さい。
- (4) 原稿右上隅に頁數を記入して下さい。
- (5) 凸版，寫眞は受けません。
- (6) 原稿は實驗，觀察，綜説，紀行等本人の創作によるものでなければなりません。
- (7) 原稿の採否は編輯幹事に一任させていただきます。
- (8) 次の原稿締切りは12月末までとします。

### 宮崎リンネ會報 第15號

昭和25年9月25日印刷

昭和25年9月30日發行

發行所 宮崎リンネ會

編輯兼  
發行人 宮崎リンネ會報編輯部

宮崎市橋通3丁目

印刷者 小倉榮嗣

宮崎市高松通1丁目

印刷所 平和印刷株式會社



宮崎リンネ會報 第13號正誤表

頁	行 (上より)	誤	正
2	10	しべると	し <u>ら</u> べると
4	21	と云へり	と <u>言</u> へり。
5	7	しかし	しかして
5	23	(8)	(3)
6	4	美々地小	美々津小
7	18	(Agelenaji m batet Th.)	(Agelena limbatet Th.)
16	最下行	とてし	として
23	17	本ケーブル防虫	本ケーブルの防虫
23	25	18,321m	1832.1m
24	24	ミヅトンボ	ミヅトンボ
31	9	モヅノオシダ	キシノオシダ
31	最下行	シマハチジヨウシダ	ハチジヨウシダ
35	4	ゲシゲツツダ	ゲツゲツシダ
36	1	コダシ	コシダ
36	2	メマヅタ	マメヅタ
37	左欄21	前井一美	藤井一美
37	右欄14	ナマヅについて	動物の体色變化について
37	右欄14	奥野 博	奥野博司
39	11	大宮高校 黒田修吉	本庄高校 宮部雄
39	12	大宮高校	大宮高校 黒田修吉

Table with 2 columns and 1 row of headers

Main table with multiple rows and columns, containing faint text and numbers. The text is mostly illegible due to fading.